

〈解答〉

- ① 1 エ  
 2 イ  
 3 〔例〕私と同じような手つきで前かけて手をふく（19字）  
 4 (1) 9（行目） (2) エ

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

- ① 「口語」は「現代の言葉づかい」、「文語」は「昔の言葉づかい」をいう。つまり、歴史的仮名遣いや古文に用いられる文体で書かれている詩が「文語詩」である。また、「定型詩」は「一定の形式や音数をそなえた伝統的な詩」で、和歌や俳句、漢詩などがこれにあたる。一方「自由詩」は「定型詩」の伝統的な形式にとらわれず、自由な内容や形式で作る詩をいう。今回の詩は、現代の言葉づかいで表記（≡口語詩）され、決まった音数ではない（≡自由詩）ため、二つの特徴を合わせて「口語自由詩」という。
- 2 詩の17～18行目にある「かわいい星に家を建てた若妻が／私の孫の孫の そんなかわいい若妻が」の部分には、反復法的な表現技法が用いられているが、「体言止め」にはなっていない。また、「かわいい」と「若妻」を繰り返すことで、作者の仕草を受け継ぐ人といとおしく思う気持ちを表現しているのであり、「羨望の思い」ではない。以上の点から、イが適当ではないと判断できる。
- 3 傍線①の直前に「娘の言葉を聞きながら／私の目には遠い昔の厨が浮かんでくる」とあるのに注目する。エプロンで手をふく自分の姿と、前かけて手をふく「若い日の母」の姿、そして「私の台所する手つき」が「お母さんにそっくり」だと言う娘、この三代に渡り、同じような仕草が受け継がれていることに気づかされた作者は、さらにさかのぼって「私の祖母のその祖母」はどうだったのだろうかと思像を膨らませた。その結果、「私の祖母のその祖母」も、自分、母、娘と同じような仕草をしていたに違いないと思ったことが、詩の21行目の「やはりエプロンで手をふいている」の部分にある「やはり」という言葉から読み取れるのである。
- 4 (1) 作者の娘が言った「私の台所する手つき お母さんにそっくり」という言葉から、エプロンで手をふくことを含めた台所での作者の手つきが、娘にも受け継がれていることがわかる。
- (2) 詩の15行目にある「ずっと先の先の未来」の想像の内容は、16行目以降で述べられている。ここでは、「地球が満員」で別の「星」に移住した「若妻」というファンタジーのような空想的な世界が想像されており、作者が、自由に楽しく発想を膨らませていることが読み取れる。